法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-03

記号論と都市　ー日常生活、文学、文化の理論を実践することー

大嶋, 良明 / Kelly, Darren

(出版者 / Publisher)
法政大学国際文化学部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
異文化. 論文編 / 異文化. 論文編
(巻 / Volume)
14
(開始ページ / Start Page)
251
(終了ページ / End Page)
278
(発行年 / Year)
2013-04
(URL)
https://doi.org/10.15002/00008701

Hosei University Repository

記号論と都市
―― 日常生活、文学、文化の理論を実践すること[1] ――

Darren Kelly（著）、大嶋良明（訳）

ようやく旅はタマラの都市へと至り、看板がごちゃごちゃと家の壁から突き出ている道をわけ入ってまいります。目はものを見ず、ただ他のものを意味するものの形象を見ております。鋏は抜歯技師の家を示し、盃は居酒屋を、鉞のするどい槍は警邏隊を、竿秤は薬種屋を示しております。像や家紋が獅子や海豚や塔や星を象っていれば、それは何かしらが――何なのかはわかりはしませんが――獅子や海豚や塔や星をそのしるしとしているということのしるしなのでございます。そのほかの標識はある場所では禁止事項――馬車をひいて露地にはいること、屋台のかげで放尿すること――やまた許可事項――縞馬に水を飲ませること、球打ち競技をおこなうこと、近親者の屍体を焼くこと――を知らせております。寺院の戸口からは豊年の角や、砂時計や、水母など、それぞれの象徴を掲げてあらわされた神々の像が見えております。そのおかげで信徒たちはこの神々を見わけてそれぞれに当を得た祈りを捧げることができるのでございます。かりにある建物が何の看板も絵姿も掲げていない場合でも、それ自体の形なり市街の秩序のなかに占めるその位置なりがじゅうぶんその機能を示しております。王宮とか、牢獄とか、造幣局とか、ピタゴラス派の学校とか、妓楼とか。…眼差は市中の通りをあたかも書物のページの上のように走りぬけてゆきます。都市は人々が考えるはずのことをすべて語り、ただその言葉をわれわれにくり返して言わせるばかりでございます[2]。（Calvino, 1997, pp.13-14）

1　本稿は Kelly, D.,“Semiotics and the city”, Integrating study abroad into the curriculum, Brewer, E. and Cunningham, K. eds., Stylus, 2009. pp.103-120. の翻訳である。

2　日本語訳はカルヴィーノ，I. 見えない都市 . 米川良夫訳 . 河出文庫 .2003.pp.20-21 より。

Hosei University Repository

第１章で概説したように、スタディー・アブロード（ＳＡ）に行く学生の多くは教室外で最も多くの学びがあると主張する。本章の目的は、教室内での学習と関連付けられまたそれを補強するような性質の学際的な学問の枠組みをつうじて、教室外での経験がどのように媒介されうるのかを実例を交えて明らかにすることである。そもそも学内と学外、高尚な文化とそうでない文化という誤まった二分法的な固定観念を切り崩すのにＳＡでの学びほど効果的なものはないというのが、私の論点である。

本章冒頭のカルヴィーノからの引用において、初めて異国の街に足を踏み入れた者は、街中が「看板がごちゃごちゃ」としており、「他のものを意味するものの形象」に直面する。本章では、都市のあまたの建造物や標識をひとつのテクストとして読みとることによって、いかにして学生たちが教室の外に広がる世界についての価値ある洞察が得られるのかを概観する。しかしながら第２章で論じたように学生たちの多くは生まれついての探検好きではなく、むしろ彼らは未知の土地に恐れを抱くのが常であり、そのあまり自らコンフォートゾーンを形成してそのなかに閉じこもりがちである。それゆえに何より学生たちには、まず街に出よう、おとずれた学びの地を探求しよう、街を歩き回る事で思索しよう、と励ましてやらねばならない。学生たちは人々の営みの流れから都市の息吹を感じ取るべきだろう、建物の中庭のような見過ごしがちな場所をいろいろ訪ね歩くべきだろう、そしてまさに「観察するわざを体得」すべきなのである。(Sennet, 1974, p123)

学生たちは意思的で批判的な観察者として、ＳＡ先の都市の持つさまざまな意味を脱構築するのだが、それは学生が眼に入るものを集中的に系統だてて観察すること、すなわち記号論を使って標識や記号を研究することで可能となる。

ここで私は、記念碑や街路の名称などを含めて都市を図像学的にと

Hosei University Repository

らえることが、学生たちがＳＡ先の都市空間の歴史的および文化的な文脈を理解する手段であり、その土地に暮らす人々との対話を始める手立てとなることを提案したい。Hertmans によれば、「都市とはすぐれて人間のコミュニケーションの領域であって、そのもっとも進化した有り様（2001, p.10）」であるから、ＳＡ先の都市を研究するということは、とりもなおさずその都市に住まう人々とその営みの源泉を研究することにほかならない。

本章において議論する街歩き、路上観察、批評の方法論の土台となる理論は、文学、文学理論、文化地理学、カルチュラル・スタディーズ、民俗誌学、文化人類学や現代フランス思想などに依拠している。そこで学生たちにこれらの文献や諸理論に触れさせておくことが、ＳＡ先の都市を読み解き理解する能力形成に資するであろうことを議論する。また本章の力点は文化理論を学ばせることとＳＡとの関係についてであるが、それが本書の他の章で取り扱われるであろう、たとえば参与観察のような調査の方法論と相い補うことが期待される。たとえば本章においては都市を歩く人の役割をフラヌールの概念と訓練法に関連付け、観察者の役割を民族誌学者や文化人類学者と関連付ける。結び付けて考えるとこれはフラノグラファーによって遂行されるフラノグラフィー編纂とでもいうべきものを考察してゆく。さらに学生たちがＳＡ先でかかわること、そこから学ぶことを促すような学習課題の数々についても議論する。

本章においてとりあげる言説と学生の活動の例の多くは、アイルランドのダブリンにＳＡ留学するアメリカ人学生のために私が授業設計し担当する IES の科目「アイリッシュというアイデンティティ」（本章では以降「ダブリン科目」と呼ぶことにする）からのものである。また本章では“都市”という単語が何度となく使用されるが、ここでとりあげる理論、調査の方法論、学習活動などはダブリンという都市に限らず他のＳＡ先の地域やホームキャンパスにおいてもさまざまな

Hosei University Repository

度合いで応用可能である。Beloit College においては、一連のカリキュラム開発が本章の成果のいくつかに基づいてなされ、同様の方法論が中国（第８章を参照のこと）、エクアドル、ニカラグア、Beloit 本校（第９章を参照のこと）、モスクワでのＳＡプログラムや本校での初年次セミナープログラムや Travel Writing 科目にも採用されている。

本章は相互に関連する以下の３つの節により構成される：「記号論：ＳＡ都市をいかに読み解くか」「ＳＡ都市を踏破する（都市を歩き、都市を思索する）」「記号論ふたたび：社会科学と文学作品との連関」。これらの各節においては科目の学習単元の概要を述べ、特定の学問分野とＳＡとを関連付ける演習の実例を説明する。また分野横断的な論集として The Blackwell City Reader や The Subcultures Reader などのアンソロジーは特にＳＡと関連性のある読み物がテーマ別に収録されているので有益である。

記号論：ＳＡ都市をいかに「読み解く」か

多くの学生にとって文学理論や文化理論のテクストを読みこなすということは、控えめに言ってもかなり骨の折れる作業であって、ときには難解すぎると思われることもあるだろう。しかしながら理論に触れるということで学生たちはＳＡで訪れる都市と関わりあう志向性と、それを理解するための語彙を身に着ける。

「ダブリン科目」の最初の授業では学生たちはいくつかの学習活動を通じて記号論の基礎的で機能的な理解を身に着けることで都市を読み解くことを学び、また都市とは広大で多様なシンボル（テクストとイメージ）と図像（建造物、彫像や記念碑）などの集合体として歴史的、政治的、文化的な文脈をともなって存在するものであることを理解する。T. Hall によれば「都市の各所に刻みこまれ付帯した意味を脱構築あるいは解体するためのさまざまな理論的な枠組みが存在す

Hosei University Repository

る。それらの枠組みはそれぞれにおいて異なっているにもかかわらず広い意味ではすべて記号論的なのである」(1998, p.28)

記号論とはもっとも単純な様式では、書き言葉から建造物にいたるまで、あらゆる標識やシンボルから人間が抽出した意味を分析することである。たとえば学生たちがＳＡ先の都市で、ある建物や記念碑を目にしたとき、店先にかかる案内標識を見たとき、その町に住む人々の衣服のスタイルに気づいたとき、学生たちはそこにさまざまな意味を読み取ろうとする。すなわち学生たちは記号論を援用して周囲の世界を解釈しているのである。この作業を意識的な行為とするために「ダブリン科目」の最初の授業では黒板にいくつかのシンボルを描き出すことで記号論の理論を明確にすることより始める。

次に学生たちは、♀＆♂、€、$、@など自分たちが日常的に目にすることのできる（あるいは読むことのできる）他の標識やシンボルを列挙し議論するが、ここではひとつのシンボルを取り上げてじっくりと考察することが求められる。なかでも私はマクドナルドのロゴを取り上げることが多いが、何故かというとマクドナルドのロゴは世界中のいたるところで見ることができるし、またダブリンのような街にもマクドナルドのロゴがあるということで、アイルランドとアメリカの真の文化の違いが覆い隠されてしまうからである。

マクドナルドのロゴに対する学生たちの最初の反応は、“ファストフード”、“アメリカ”、“肥満”、“グローバリゼーション”などである。次に学生たちはマクドナルドのロゴが他の国においてはどのような意味を持ち得るかを議論するように言われる。たとえば、中国の若者たちにとってマクドナルドのロゴはある種の好感を持って受け止められるばかりか、エリート的な身分さえ体現するものである。1990年にはじめてモスクワにマクドナルドが出店した時には、開店を待つ長い人の列ができたという。このようにして学生たちはマクドナルドのロゴが一方では民主主義と自由を意味するものとして扱われ、別の人々

Hosei University Repository

にとってはアメリカによる帝国主義の象徴として受け止められるという文脈性をもって意味を解釈することを学ぶ。マクドナルドのロゴを考察することで学生たちは、同一のロゴが世界中で目にすることができたとしても、それぞれの土地において固有の解釈がなされることを理解するのである。逆に赤十字のように学生たちが世界共通だと思い込んでいたシンボルの中にもそうでないものがある。地理学や宗教上の理由から 1919 年には赤新月が創設されたのであるが、ほとんどの学生は赤新月のロゴを識別することができない。それは赤新月が学生たちが準拠する参照の枠組みの外にあるからである。記号論的な取り組みにおいて、学生たちは視覚情報の受動的な受け手にとどまることは許されない。むしろ積極的に調べること、解読すること、そして自己省察することを強いられる。Hertmans が言うように「君たちはとかく物事を一般論で捉えようとする性向がある。だからこそ細部を、個人をきちんと見なくてはならない、そうしなければ君たちはじきに世界全体がわかったような気になるだろう―それこそが物事が何も理解できていないということなのだ」(2001, p.103)

次に「ダブリン科目」の学生たちは、自由の女神、金門橋、ナイアガラ瀑布、グランド・キャニオンなど特定の有名な建物や風景が何かを暗示するかを考察するよう訊ねられる。9/11 以降のツイン・タワー跡地について考察せよと言われると、学生たちはたいてい“恐怖”、“イスラム人によるテロ”、“自由や民主主義への攻撃”などと反応する。こうした問いかけをすることの目的は、学生たちにいかに建物や自然環境が特定の感情を惹起しうるのかを説明し、後に言葉がそれらの感情を伝播することを理解させることにある。

学生たちが話し読む言葉のような目に見えない標識もまたさまざまな意味性を帯びている。ノーベル賞作家トニ・モリスンの「青い眼がほしい」(1970) の一節を読んだ学生たちに "white" や "black" という単語から何を連想されるかを問いかける。学生たちは前者に対して雪、

Hosei University Repository

純粋さなどを連想し、後者に対して暗黒、夜、汚れなどを連想すると答える。小説のなかではふたりの子供のうちのひとりは、black という色にネガティブな連想を、white という色にポジティブな連想を内在化させてゆくのに対し、もうひとりはまったく逆の連想を内在化するが、それはのちに二人の子供に起きる自己理解と行動の数々を暗示している。この読書体験から学生たちの間に言語が持つ力についての大きな議論が巻き起こる。それは言語そのものが人間を類型化し先入観をもたらす力を持つばかりか、ひいてはさまざまな“排除の地理学”につながるような道徳観の混乱を生み出す力さえ持つということである。モリスンの著作自体がすぐれてポストコロニアルな読みとなり、フェミニズムの読みとなることが明らかになる。

最後の課題として、視覚の記号論と言語の記号論を結びつけるために私は学生たちにメインストリートがそれぞれ Queen Victoria と Karl Marx の名前を冠した二つの都市を考えることを課題とする。グループワークでは、都市を訪れる旅行者が街路の名前から思い浮かべるその都市の属性として、歴史的、政治的、そして社会文化的にどのような含意がありうるのかを議論する。さらに学生たちは自分たちが住むアメリカ国内の名だたる街路や建物に冠された名前について議論する。

●記号論とフォトエッセイ

写真は記号論について学生たちの理解度と実践力を調べる好材料である。クラス内で写真を共有することで学生たちは同じ写真を見てそれぞれが異なった解釈を施すことを直接に経験する。学生たちは技術的なまた視覚的な基礎能力を持ち合わせていても、写真を撮るとはどういうことなのかを正しく理解していないことがしばしばある。写真を撮るいうことは視覚的に物語を捉える一方法であるのだが、それを写

Hosei University Repository

真を撮るということはそこに写っているものの背後にある物語を記憶にとどめる方法であると勘違いしているのだ。そこで、学生たちがより意思的で識別眼をもった写真を撮れるようにするために、Power Pointを使ってテーマ性のあるフォトエッセイを創作する課題を出す。この課題に取り組む中で学生たちはそれ自身が語りかけるようなイメージを捉えるにはどうすればよいか、なぜそうしなければならないのかをじっくり考えざるを得なくなる。与えられる課題のテーマとしては例えば建造物、ゴミ、落書き、自然、政治などがある。受講者の評言によると「フォトエッセイは素晴らしい、なぜならこの課題を通してダブリンをあるひとつのテーマに沿って眺めることになったし、それが後々この都市についての研究テーマに発展させることになった」とのことである。別の学生は「フォトエッセイの課題は本当に楽しかった。カメラの背後に身を隠すことで、自分が撮影したくないものを排除することができたから」とも言っている。

クラスではどういう写真がもっとも効果的であるか、どのように画面構成すれば良いかを議論するのであるが、そこでは例えば一本の立木を境界線として使う手法や、その場に居合わせた人々にカメラの視界を横切るように頼んで画面の中に自然に人々を配置する手法などを扱う。また Prosser の“Image-based Research: A Sourcebook for Qualitative Researchers”や Pink の“Doing Visual Ethnography: Images, Media, and Representation in Research”および Evans と Hall が編纂した“Visual Culture: The Reader”の各書の抜粋からは、視覚による物語と方法論的な基礎知識を得ることができる。

●ダブリンの街路名と記念碑をテクストとして読むこと、解読すること

Yvonne Whelan の Reinventing Modern Dublin（2003）を読むことで記号論がダブリンという都市を解読し脱構築するのに役立つことが

Hosei University Repository

良くわかる。Whelan は英国の支配から独立後のダブリン市内の地名が有する歴史的、社会政治学的、文化的な意義と含意を調査研究した。この時期を通じてダブリン市内の多くの街路名は変更されたのであるが、その一例は目抜き通りの Sackville Street の名前が O'Connel Street と変わったことである。街路名を分析することは記号論のひとつの形態である。ポストコロニアルな読みは歴史的な文脈に重点を置くが、フェミニズムの読みは都市景観の中に見られる男性名の多数性に着目する。学生たちは種々の街路名からそれらが建設された年代を推測することができる。特定の街路のダブリン市中での位置と建築様式を考え合わせると、それらが建設された日付を特定することができる場合もある。

Whelan が書き記したところによると、街路名が時代とともに変わるだけではなく、記念碑もまた取り外され、取り壊され、また移設されたのである。国家はみずからを体現し、それが辿ってきた過去を表現するために記念碑を建造する。その一方で国家は過去からの決別をはっきりとさせるために既存の記念碑を取り外したりそれらに変更を加えることもある。もし学生たちがこのような記念碑をテクストとして読むことができるならば、すなわちそれらの文化的、歴史的な文脈と重要性を理解することができるならば、記念碑とはもはや風景の一部としてとどまることはなく、それ以上の意味を持ちうるのである。Whelan は、さまざまな議論を呼んだヴィクトリア女王の彫像の事例を引用して述べている。この彫像は 1948 年にアイルランド国会議事堂の前にあったものが取り除かれ、何度か場所を移動させられた後に最終的にはオーストラリアのシドニー市民に寄贈され、現在はシドニー市庁舎前の Bicentennial Plaza に立っている。（Whelan, 2003, pp.195-201）

クラス授業では O'Connel Street 中心部に立つ、針のような形状の世界最大の自立型彫刻、高さ 390 フィートの Dublin Spire について

Hosei University Repository

調べてみる。この彫刻は多くの市民や旅行者が待ち合わせ場所として使うので､学生たちは全員よく知っている。しかし高いだけではなく、それ以上にこの Spire が深い歴史を有すること、それはあたかもダブリンの歴史的な、社会文化論的な DNA のなせる業であるかのようにアイルランドの過去とその集合的記憶を受け継ぐ作品として、学生たちの知るところとなるのである。

Dublin Spire が立っている場所には、今から 200 年前にネルソン提督の栄誉を讃えるために 121 フィートの柱状の碑が建てられた。英国海軍の優位性とトラファルガーの戦いの勝利を象徴するものが、ダブリンの中心部に建造されたという文脈において、この柱状碑はアイルランドの植民地化と抑圧の象徴でもあった。この柱状碑は 1966 年に IRA の分派によって爆破された。その後 1988 年にダブリン千年祭を記念してこの場所にはブロンズの女性像 Anna Livia が建造された。Anna Livia とは Liffey 川の女性人格化である。土地っ子たちは Anna Livia のことを「泡風呂の売女（"the floozy in the jacuzzi"）」とあだ名で呼んだが、ほどなく 2002 年には Dublin Spire に取って代わられたものの、Spire 自体も賛否両論を巻き起こし、これを好む市民もいれば忌み嫌うものも多くいたのであった。そのあだ名「ゲットーのピンヒール（“Stiletto in the Ghetto”）」はその近辺に新たに住みついた移民と彼ら相手の商売を揶揄したところにその起源がある。このように公の場所や建造物につけられた俗称というのは、庶民の（言葉の）力が記念碑や地名に付された意味（名前付けや先入観）を転じて変容させる好例である。Tuan が言うように「名前をつけることは力である。」Cresswell は「記憶をそこに刻み付けることの重要性」について以下のように論じている：

> 記念碑、博物館、特定の建造物の保存（と同時に他の建造物を保存しないこと）、飾り額、碑銘、周辺一体を歴史的保存地区とすること等は

Hosei University Repository

すべからく記憶をとどめようとすることの実例である。…場所と記憶を結び付けようとすること、またその競争的な性質がつねにたくさんの照会の対象であった。

●上書きされる手稿としての都市：現在の中に過去を見ること

過去の残骸のうえに建造されてきた都市（通常はローマのような都市）には歴史が蓄積しているが、その歴史はかならずしも辻褄が合うようには積みあがっていない。そのような都市は常にフロイト的なアナロジーに満ちている。…廃墟や記念碑の数々や都市の建造物は、過去がたえまなく現在に打ち付けるような環境を指し示している…そして精神分析が過去の持つ力を明らかにし、それが現在の人生にどのように作用するのかを明らかにすることに専念するのとちょうど同じように、都市文化の研究は都市の形象を理解することを目指さねばならない。（Highmore, 2005, pp.4-5）

「ダブリン科目」の学生たちはHighmore流の精神分析的手法を援用して今日のダブリンを形成とその文化を生じせしめた歴史的、政治的、経済的、および社会文化論的な諸過程を探求する。現在の中にある過去を理解すること重要である。さもなければ我々は都市を静的で変化しない場所として眺めることになってしまう。それぞれの場所は物理的にも文化的にも時とともに変容するものであることを見失ってしまうことになる。もっとも顕著なところでは、都市の歴史的に異なる時代が、小さな家々と摩天楼のように対照的な建築物が並び立つことで明らかになることがある。古い建築物であっても、それが壮大なものであれば時代を生き延びるものもある。カルヴィーノが書いているように都市というものは「ときとして同じ地の上に、しかも同じ名のもとに、まったく異なる都市がたがいにとって替わり、またそこにおのが姿を認めることもなく、たがいにつうじあう術もないままに生れて

Hosei University Repository

はまた滅んでゆく[3]」のである。(1997, p.30)

ダブリンの現在の中に今なお残る過去を明らかにするために、学生たちはダブリン市街の拡大の様子を中世、ジョージ王朝時代、テネメンツ時代、郊外化、現代の五つのおおまかな時代区分に沿って学ぶが、その際には、市街部の拡大のそれぞれについて政治的な諸事由や経済的および社会文化論的な実態をも考察する。ひとつ例をあげると、1601 年の初代オーモンド公の誕生がその前触れとなったが、アイルランドが自己統治を取り戻したことで、いわゆるジョージ王朝時代様式のダブリンの形成が始まったのであった。1700 年代にはダブリンは世界でもっとも美しくエレガントな都市のひとつとなった。大きな邸宅が広場の周りに立ち並び、政府の庁舎はホワイトストーンを用いて新古典主義のヨーロッパの伝統を取り入れたものであった。これらのなかで最も栄えた区域は現存しており、今日ダブリンを訪れる観光客たちをひきつける名所となっている。この区域はまたＳＡ学生たちが住まう地域のひとつでもあるが、自分たちが住む土地の本当の価値を知るためには学生たちは時を遡って昔日に目を向ける必要がある。

1798 年の叛乱が失敗に終わった後、1801 年には Act of Union が可決されてアイルランドの中央集権と自治がイングランドに取り戻されてからはダブリンの繁栄は急落してゆく。ほんの二、三十年の間に政治的な支配層がイングランドに戻ったり、あるいはダブリンを離れて勃興する郊外の領地に移り住んだため、ダブリン市内は逆に社会制度を維持運営する税収不足、都市部人口の郊外流出、地主たちによる執拗な搾取地代などで内部崩壊を招いた。その結果として到来したのがダブリンが極貧となった時代、いわゆるテネメンツ時代であった。口述の歴史資料や Sean O'Casey の戯曲からの抜粋を紐解くことで学生たちは当時の人々のあるがままの姿を理解することになる。

3　カルヴィーノ . 前掲書 .p.42

Hosei University Repository

このように時空をこえたダブリンの変遷を追究するために学生たちは図書資料やGoogleを活用して地図を調査し、みずからも地図を作成する。時代とともに市街地区域が拡大するさまはあたかも年輪が成長するようにたち現れるが、その年輪の最後がダブリンを外周するM50自動車道路である。ある特定の時代におけるダブリンの政治的、社会経済学的、文化的な実態を理解するために、私は学生たちに調査結果をもとに作品制作をさせている。学生たちは創作的な課題によろこんで取り組む、また個人制作でもグループワークでも作品制作上の自由を上手に創造的に取りこんでいる。学生制作のなかには、テネメンツ時代のダブリンに住む家族がアメリカにいる親戚にあてた手紙などがあったが、これには念入りに染みや焼けなどの時代付けが施されて破れかけている。また他の作品としては詩、唄、短篇などもある。ある学生は“中世のダブリン”という子供向けの絵本を描いたし、別の学生は本格的なジョージ王朝時代の人生ゲームを制作した、ほかにも建築模型を制作した学生たちもいた。これらのプロジェクト作品はかならずプロジェクトの説明書、構成原理、参考文献リストを添えて提出される。

ＳＡ都市を踏破する（都市を歩き、都市を思索する）

ダブリンの街中を歩くことは、「ダブリン科目」の重要な構成要素である。なぜかというと歩き回ることで学生はアイリッシュであることのアイデンティティについての理解を深め、それが異文化を学ぶことに役立つからである。現代思想（とくにド・セルトーのもの）、実践（flânerie）、社会学の理論（シカゴ学派）、カルチュラル・スタディーズ（バーミンガム学派）などを活用することで、学生はＳＡ先での体験や観察を解釈し理解を深めるための新たな方法とそれを記述し議論するために必要な言語化の手立てを身に着ける。

Hosei University Repository

● Flânerie

街歩きと観察の方法を学ぶには学生はまず flânerie を知るべきだろう、flânerie といって必ずと言って良いほど連想されるのは、19 世紀パリの遊民紳士たち（flâneur）の嗜みであるが、目立たぬように徒歩で街中を散策し、ときにはカフェに身を潜めて日々の生活のなかで“路上繰り広げられるさまざまな出来事”を観察することであった。（Baudelaire, 1965）

flânerie は男性の退廃的な遊びの領分として否定的に描かれてきたが、社会科学や現代思想の領域では時代とともに flânerie から得られる理論的、社会政治学的な、文化的な洞察については徐々にその価値が認められて、flânerie の実践は研究手法としても取り入れられている。街中を歩き観察を試みることは、都市空間の研究や日用品のありようや消費の研究に影響を及ぼしたのである。もっと今日的な文脈ではたとえば“Sex and the City”に登場するキャリー・ブラッドショウなどはさしづめ今日の flâneuse（女性版 flâneur）と評しうるだろう。

flânerie の社会学的な効用について最初に論じたのはウォルター・ベンヤミンであったが、ベンヤミンはフランスの詩人 - 遊歩者としてのボードレールに言及しつつ、flânerie を“アスファルトの生態観察”と呼んだのである。（1973, p.36）ベンヤミンによる flânerie の用法については画期的な著作「パサージュ論」において明示的に表現されているが、それはパリのアーケード街を訪ね歩いて消費のありようや空間の利用法をつぶさに観察することであった。flânerie について同じく連想されるのは社会学者ゲオルク・ジンメルによる“The Metropolis and Mental Life”（1950）である。1903 年に公刊されたこの論文においてジンメルは都市における“可視のもの”の重要性と優位性について述べ、都市のさまざまな断片を「顕微鏡的に」観察することを論じている。さらにまた Frisby や Jenks も flânerie 的な役割

Hosei University Repository

の今日の社会科学へ関連性を支持しており、flâneur あるいは flâneuse 的な能力を持って迷宮のような都市を踏破し、その街のさまざまなリズムを観察し、可視の手がかりを読み取ること、インサイダーであると同時にアウトサイダーであることを論じている。

flânerie の概念と記号論や“見る技法”とを関連付けるために、学生は flânerie とフォトエッセイに特化したウェブサイト（www.flanerie.org）をチェックし、そこからひとつのエッセイを取り上げてクラス討論し、彼ら自身のフォトエッセイ構成の参考とする。Jenks は flâneur とは心理―地理学者であってフォトジャーナリストの観察眼を併せ持つ地図製作者ではないかと立論する：

> 歩く人は…遊びゴゴロゆたかで巧みなやりかたで、都市のさまざまな要素の対比になかに今まで隠されていた新たな関係性を見出すことができる人である。…この概念上の秩序の再構成はひとえに街を歩く文化批評家が想像で理論化するところによるものであって、そこでのさまざまな技法の多くはフォトジャーナリストの仕事の領域となったものである。

一方で Frisby は flânerie を調査ジャーナリズムと結びつけており、flâneur は単に群集とともに街歩きをするだけではなく“路地や中庭やちょっとした芝生”などの見過ごされがちな場所を探訪しなかればならないと論じている。Amin と Thrift は遊歩者詩人としてのボードレールに関して述べるなかで彼は「無邪気な好事家」だったのではなく、むしろ「ボードレールの内省的な街歩きは都市生活についてのある特定の理論化に裏づけされたものであって、針の眼をもっていま起きつつある物事の過程の正体を明らかにする理論への欲求に発するものであった」（2002, p.10）

Hosei University Repository

●フランス現代思想と日常生活

ミシェル・ド・セルトーの著作は学生たちが観察した事物を選択し、序列化し、そして解釈する手助けとなるが、まずはセルトーの1984年の“The Practice of Everyday Life”から“Walking in the City”の章を読むことである。この章はカルチュラル・スタディーズやアーバン・スタディーズのアンソロジーに収録されているのをよく見かける。この章の冒頭はツイン・タワーの階上からの眺望について論じるところから始まるのであるが、セルトーによれば、その眺めは都市計画に携わる者や官僚たちの特権的な眺めにほかならない。彼の論じるところでは、日常生活にみられる「…微生物のような、個々のあるいは複数の実践を分析できる眺めである」どころか「都市生活のシステムとは管理し抑圧するものとしてあるという眺め」なのであった。（de Certeau, 1988, p.96） セルトー的な彷徨い人は空間を測り直す能力を備えている、あるいは私がいうところの“その土地にふさわしい間合い”に再構成する能力を備えている。これをダブリンに応用すると、学生たちはダブリンの都市空間の間合いを新たに形成されたコミュニティーやエスニックグループなど、さまざまな集団がそれぞれに異なった流儀でもって土地や空間を利用してきた有り様を体現するものとして、その土地に住む人々の活動のリズムや速度に始まり、公園やその他の公共空間の利用形態や、仕事の手順や営業時間に至るまでを理解するのである。学生たちが、ダブリンの街中を一日のいろんな時間帯に、また週のさまざまな日に歩いてみることは、まさにルフェーブルが提唱した都市のリズム分析（rhythmanalysis）の実践である。ちなみにルフェーブルは、ホテルの窓から見えるパリっ子たちの往来する様子をつぶさに観察する中からこのリズム分析の着想を得たのであった。

学生たちがflâneurとして活動し、リズム分析を援用しつつJenk

Hosei University Repository

のフォトジャーナリズムを追求することで、彼らはダブリンの街に侵入し観察し都市空間を批評するのであるが、都市としてのダブリンは日中はビジネスマンで溢れかえり夜間には空っぽになる空間、富裕層と貧困層が住まう区画、彼らが混在して住まう区画、あるいは移民層が住まう区画の数々なのである。住み始めてしばらく経つと学生たちは、高級住宅街の住民、ゴス、スケボー族、旅行者などのサブカルチャーグループによる、都市空間のなかで制度化された身なりの違いや空間の使い方の違いを見分けるようになる。

●シカゴ学派とバーミンガム学派

シカゴ大学社会学科やバーミンガム学派として知られるバーミンガム現代文化研究センターによる画期的なエッセイの数々に触れることで、学生たちは街歩きのなかで観察すること、秩序づけをおこなうこと、批判的に分析することとの連関を発展的にとらえるようになる。シカゴ学派は都市の談話構造や参与観察のような調査法への導入として役立つ。シカゴ学派は都市の景観を流動体としてみなし、そこには移民の流れ、増大する機械化と都市のスピードが生活の歩調と都市の成長に影響を及ぼすとみなした。学生たちはこの都市を流動の現在形としてとらえる考え方を援用して、ダブリンの富裕層が都市の中心地域のあちらこちらに侵入する現象を研究し、質的研究法と量的研究法を組合わせることの価値を実地に学ぶのである。バージェスによるシカゴの同心円状の地図を知ることで学生たちは自分たちのダブリン研究とその物理的な形態変化を時代的、空間的に研究することや市内中心地域の変遷を人口統計や文化の観点から地図化する作業などの価値を認識し、学びの文脈に位置づけるようになる。テンプル大学から参加の学生のひとりはこのように述べている「シカゴ学派流を教わった。街中に出掛けて行ってまずは物事の原因とその影響を直接に目にする

Hosei University Repository

こと…市街地歩きの旅がこのクラスの一番の活動の中心、街歩きをしなければ授業で教わった概念の数々をきちんと把握することは困難だろう。」フィールドワークが教室内での学習内容を相互補完し、さらに深化させるのである。

シカゴ学派と同様にバーミンガム学派も1970年代から1980年代にかけて異なるサブカルチャー集団の文化的な行為を観察し分析することを実践してきた。こちらの事例においては、社会学者たちは移民文化がホスト社会（英国）に及ぼした影響について着目し、音楽やファッションにおけるサブカルチャー運動の政治的および社会経済学的な重要性について研究した（Hebdige, 1979）。これと同様に「ダブリン科目」の学生たちはflânerieや観察においてはアウトサイダーなのである。以下の節では学生たちがみずからの役割をアウトサイダーあるいは移民と意識的にとらえ、異文化に相互関与する学びを発展させかつまた未知の文化的環境への適応能力を強化するための、自己省察的な過程について議論する。

●ボディーランゲージ、プロクシミクス、文化と様式の意味

> 都市においては外見がすべてを語る…外見上の徴候やそぶりなどから私はこれから関わりあうことになる人物の性格を心の中で組み立てているのである…（Raban, 1974, p.29）。
>
> すべからく服装は良く知られたあるひとつの機能をはたす目的がある…その人物の社会階層のなかでの地位をはっきりと示すこと、そしてそのことは容赦なく直感的に理解されるべきであること…今日でも階級の上下は明確に残っている…都会人の画一化した服装とは、ただただ差別化と恣意的なバラエティを機能させるだけのものであって、ワーズワースが都市のおおいなる病と断じたところの、見たところ大して意味もなく絶え間なく移り変わるスタイル、そのひとつの重要な徴候である。
>
> 都市の一部となるためには、都会風のスタイルが必要だろう、自己

Hosei University Repository

を投影するアイデンティティのために、自分流の金のかけ方を心得ているということなのだ（Raban, 1974, p.62）。

あたらしい環境において、文化と様式のもつ意味を観察を加え省察するには、学生たちはまず彼ら自身の文化の様式とボディーランゲージが意味するもの暗示するものについて考察してみる。我々は自らのボディーランゲージや周囲環境を意識しないのが常である。Hertmansによれば「自国とは我々を取り巻く周囲の世界が見えなくなる場所のことである。周りが気にならないからこそ、我々はずっと遠くにあるものに考えをめぐらすのに必要な心の平安を手に入れるのだ。自国においては事物は、良く知られた当たり前のものとして目立たなくなる（2001, p.206）。」そこでクラス内が打ち解けた頃に私はドラマ仕立てのワークショップを企画して、学生たちに自分たちの無意識の振舞いに注意を向けさせ、人間同士のかかわりあいの中にある文化の文脈を理解できるよう手助けをする。

ワークショップのひとつにおいて、私は学生たちに普段から良く知っている場所をあるきまわるのと同じような調子で教室内を歩き回るようにさせ、私は学生たちが歩く様子に5とか6の番号を付ける。次に学生は神経質な様子で歩くように求められる。歩調はゆっくりに変化し、それに素早く周囲をうかがう素振りをともなうようになるが、これには3や4の番号を付ける。今度は学生に自信に満ちた人間になったつもりで教室内を歩くようにさせると、彼らの歩みは足早で権威的な感じを帯びるので、これに7や8の番号を付ける。その後に私はただ1から10までの番号だけを言うと、学生たちにそれに合わせるように歩調を変化させる。面白い事にほとんどの学生はそれぞれの番号が言われると同じ人物になりきるのであるが、このことは意識的にまた無意識的に自分を適合させる文化的な規範があることを説明している。

Hosei University Repository

エドワード・ホール（1966）は、プロクシミクスという用語で対人関係の距離を表現し、それは自分がおかれた空間が親密であるか、個人的であるか、友達間のものであるか、公共的な空間であるかに依存すると説明した。ホールの研究成果を検証するために、私は学生たちにインタビューに臨む場面を想定して教室に入り、握手をして、腰をかけるように指示するが、このときそれぞれの学生にはインタビューアを演じる別の学生をあてがう。役を演じた学生たちはほぼ似通った対人的距離を保って腰をかけることになる。さらに学生たちはさまざまに違った状況で、たとえば最初のデートだったらどうなるかというような設定で無言劇を演じることを楽しむが、大体においてボディーランゲージで何を言いたいかはお互いに通じ合うものである。それは文化を共有しているからである。引き続きクラスでは私たちのボディーランゲージや文化的な約束事が、別の文化圏においてはいかに異なったかたちで「読まれうる」かを話し合ってみる。

flânarie とリズム分析を実践する時には、学生たちはダブリンを探索するのに先を急がずじっくり取り組むように言われる。学生たちはそれぞれ課題を与えられて、公園、ショッピングモール、鉄道の駅、パブ、カフェなどの探究の場所を選択する。多くの学生たちにとってじっくり取組むというのはやりにくいことであって、彼らはじっと座って、観察して、あれこれ考えをめぐらせるよりも、いつも何かをしていたいし、お金を使っていたいし、あちこち動き回っていたいのである。それから、アイルランド人に比較すると、アメリカ人の学生たちは賑やかなので公共の場では場違いに目立ってしまいがちである、というのもアイルランドでは一般に話し手の声の大きさは会話の相手がようやく聴き取れる程度なのである。さらに言うならば、アメリカ人の学生たちはアイルランドはハイ・コンテクスト文化なので、直接的な言動は乱暴に映るということに気が付いていない。これの意味するところは、彼らは標識に何が書いてあるのか判読できない未知

Hosei University Repository

の世界に身を置いているのであり、そこでは彼らの立ち居振る舞いは理解できない一連の暗黙の約束事によって判断されるということである：

> 未熟者があれこれ細かい定めの世界によろめき迷い込んでいく…（Raban, 1974, p.47）　新参者はまず自らの過去をはぎとられるに違いない、もういちど赤子に戻らねばならない、それはすべてにおいて無辜の存在であってただ残るのは己の無知と弱さを思い知ることのみである…（Raban, 1974, p.49）　彼は自分がシンボルと身ぶり手ぶりだけの世界にいることに気が付く…あなたは歩き回る符号となる、あなたは読み取られ、しばしば見知らぬ人たちによって誤って解釈される…あなたはシンボルの衣紋掛け…私のぼんやりした色白さは、私がこの世界に来て間もないと言う事を辛辣に物語る不名誉の印であった（Raban, 1974, p.51）。

学生たちが、学んだ理論をきちんと自分のものとして実地に応用できたかどうかは、彼らの両親や友達がアイルランドを訪れたときに明らかになる。学生たちは、自分の両親に向かって大声で話をしないようになどと注意して、地元の習慣に慣れさせようとしている自分の姿に気がつくのであるが、それは彼らがアイルランド的なものを取り込んで生きるなかで、インターカルチュラルな基礎能力を身に着けた事が認識できたということでもある。

●文化と空間を読むこと

flânerie とシカゴ学派やバーミンガム学派の調査手法は「ダブリン科目」のなかでたくさんの課題の形を生み出したが、それらの課題において学生たちが学んだことは文化と空間を読むと言う事である。一例をあげると街歩きツアーではダブリン市内であまり人気のないサブカ

Hosei University Repository

ルチャー、あるいは流行遅れと取られているサブカルチャーは、空間的にも中心から外れたところに追いやられていることを学ぶのである。たとえ外れているといっても、もっとも人気のある通りからほんの通りふた筋みすじの隔たりであっても、着いたばかりの学生たちはそういうサブカルチャーを見つけることができない。そこで街歩きツアーではさまざまなサブカルチャー集団が居並ぶ長く曲がりくねった街路をたどるのである。その道に沿って、古着屋、中古品屋、アダルトショップ、小さな賭博場、代替療法の薬局、ダブリンを代表する最大級のゲイバー、NGO、ボランティア団体などが立ち並ぶ。ベンヤミンが好んで分析したような造りのアーケードをくぐって中に踏み入れると、そこには切手やコインなど収集品の屋台、占い師、ピアスやタトゥーのサービス、有機栽培の商品、地元のアートや工芸品、宝石店などが古着屋やアジアからの輸入衣料などと入り混じっているのが学生たちの眼に飛び込んでくる。

文化における流行しているものと流行おくれのものの近年の入れ替わりは街路やアーケードを“移り変わりゆく地帯”に変えてきた。古着屋、LP レコード、代替医療などはゲイバーと並んで今日のダブリンでは流行の先端にあって、これらに関係するビジネスが値上がりし、おしゃれなカフェがコーヒースタンドに取ってかわったため、街路やアーケードの様子に大きく影響を及ぼしている。このような“文化流行”は、富裕層の流入とも関係があり、需要が減ったとみなされるサブカルチャーは周辺部に引越してゆき、また賃料の値上げにより長らくやってきた屋台のオーナーの中に引越しに追い込まれた人たちもいる。これらの変化について屋台の店主たちへのインタビューから、学生たちはダブリンや他の都市が時代の変化とともに文化面での形態的変貌を遂げることへの洞察を得るのである。

記号論ふたたび：社会科学と文学作品との連関

Hosei University Repository

本章は記号論の理論と学生たちが看板や記念碑や言語を脱構築する方法を如何に学ぶかから出発した。これらのツールを使いこなすためには、第２節で概説したように、学生たちは社会科学の理論に対する批判的洞察力と調査研究の方法論を身に着けた flânographer として都市を歩き観察を行うよう促される。学生たちは教室の外に飛び出し、冒頭のカルヴィーノの引用（1997, pp.13-14）に立ち戻って言うならば、街を“あたかも書物のページの上のように視線が走り抜けて”ゆくのである。文学作品における都市と風景の中心性からは文学、社会科学と文化の理論を結びつける関連性が強調されるのである。「ひとりの作家によって本が書かれるように、そしてそれが今度は文芸評論家による批評の対象となるように、風景あるいは空間とは一団のエージェントによって“書かれる”ものであり、地理学者によって批評の対象となる」（Whelan, 2003, p.13）。

人文科学、社会科学のテクストは学生たちがＳＡ先の土地を理解する助けとなるであろうし、さまざまな学問領域でのものの見方と批判的思考の大切さへの眼を開いてくれる。例えば Jonathan Letham による Fortress of Solitude（2003）は Neil Smith の The New Urban Frontier: Gentrification and the Revanchist City（1996）を補う。どちらの本もニューヨーク都市中心部への富裕層の流入の問題とアイデンティティ、空間、権力の政治的構造をとりあげている。Smith の研究は中流階級たちによる“未開拓の”都市中心部への進出を正当化するために用いた言葉の権力性をとりあげ、それはアメリカの“大いなる”西部に向けての移住拡大が言葉の力によって正当化されたのとまったく同じであったとはっきりと論じている。文学は場所の持つ情念的な、物理的な、精神的な現実に踏み込むことができるが、それはいわゆる科学ではなかなか扱うことができないやり方による。Sibly はこのように書いている、「何の変哲もない物事にひそむ奇異、それ

Hosei University Repository

はジェーン・オースティンからマイク・リーにいたる小説家たち脚本家たちによって微視的にえぐり出されているが、それは社会地理学においては軽視され続けてきたものであった（1995, p. xv）」

Highmore（2005）と Jenks（1995）は文化地理学者たちやカルチュラル・スタディーズの研究者たち、とくにバーミンガム学派たちが自然科学よりも人文学に目を転じたことで、風景がテクストとして解釈される研究事例がぞくぞくと増えた。"Cultural Geography" において Crang は次のように述べている：

> 文学的風景とは文学と風景との結合したものと捉えられるべきで、文学は外界を別のレンズを通して描くもの、外界を鏡のように反映するもの、外界を歪曲して描くものではない…文学とは主観的なものと言い切ることは大事な点を見のがしている。文学とは社会的な産物である…イデオロギー、人々の信条、時代を画する出来事はいずれも文学のテクストを形作るものであり、また文学がこれらを形作るのである…ここで我々は地理的な記述がそれほど文学とかけ離れているのかどうかを問うてみたい。地理学と文学とを二つの異なる知の秩序（ひとつは想像的なもの、他方は事実に基づくもの）と捉えるべきではなく、むしろ“文学のテクストが内包する世界性と地理学のテクストが内包する想像力”のどちらにも注目するためには、ジャンルの異なるテキストが共存する領域と捉えるべきである（1998, p.57）。

ジェイムス・ジョイスの“ユリシーズ”やヴァージニア・ウルフの“ダロウェイ夫人”などは後世に大きな影響を与えた作品であり、いずれも都市を探索することがその作品の中核をなすものであるが、学生たちはこれらのテクストを注意深く読むことによって、いかに都市をテクストとして読むことができるか、あるいはまた都市がテクストそのものであるということを理解するのである。Crang の本の第 2 章において、ジョイスの“ユリシーズ”は場所のナラティブの例として引用されており、主人公レオポルド・ブルームが 1904 年 6 月 14 日に

Hosei University Repository

辿った行程が、まさにモダニストとしてのジョイスの小説の仕掛けの主要な構成要素となっていることが、ヴァージニア・ウルフが“ダロウェイ夫人”においてロンドン市中をまる一日かけて歩いた主人公クラリッサ・ダロウェイの足跡を辿ったのとまったく同様であったことが論じられている。Crang を引用すると：

> 都市の複数性というのは、相異なる場所に関する語りが思いがけずぶつかり合い交錯するところで明らかになる。そこではテクストという形式で日常生活のリズムが規定される。このようなテクストを読む行為は、他人が街路を散策するのを眺めるのではなく自分自身がその道を歩いてみることと似通っている。このようにして作品は都市についての単なるテクストであることを越えて都市生活の体験とテクスト自身の融合したものへと向かうのである。テクストは単一の記述であることを止め、都市における経験の複数性をそれ自身が引き受けるのである。（1998, p.57）

ダブリンという都市はもはやレオポルド・ブルームが彷徨する舞台であるにとどまらず、彼自身の内なる語りをひき起こす抗いがたい原動力となっている。実際にダブリンはおびただしいサインやシンボルにあふれており、ブルームはこれらを記号学者の鑑識眼をもって観察するのである。ブルームと都市との関係を理解することは、学生たちが自分が見た物や自分が訪れた場所が彼らのダブリン理解に繋がってゆくさまを意識的に検証する助けとなる。ボードレールからジョイスにいたる文学作品を詳細に分析することを通じて学生たちは、街歩きの調査上の役割（すなわち flânerie の方法論）、いかに記号論を援用するか、都市の躍動、色彩、喧騒、匂い、味わいそしてリズムをこれらの作家たちが言語表現を通して翻訳する技巧の素晴らしさに気付きを得るのである。これらのテクストは学生たちをダブリンを批判的で自己省察的な目をもって「読み解くこと」および彼ら自身の体験をでき

Hosei University Repository

るかぎりの生命観と感動を持って「書き記す（もしくは表現する）」ように促すのである。

結論

写真表現と flânerie を通して記号論を理解すること、シカゴ学派やブルームフィールド学派の都市研究の手法、日常生活にまつわる生産と実践についての現代思想、そして文学、これらすべてを結び付けることで学生たちは SA 先の都市を脱構築するのみならず彼ら自身による都市とそこでの体験を構築することができるのである。カルヴィーノが書いたように「都市から得られる歓びは、その七不思議、七十七不思議などではございません、ただわれわれの問に寄せるその答でございます。」「さなくば、テーバイの町がスフィンクスの口をかりて発するがごとく、返答を強いる問かだ。[4]」（1997, p.44）ということではなかろうか。ある学生の言葉を借りて言うならば：

> 学期が終わるまでには、私は、さまざまな時間と空間の中にあったダブリンの街の、ありとあらゆる異なった姿にひとつの理解が得られた。しかしこのコースを受講して最も良かったことは、ダブリンがとうとう私の街となったことである。またそれが、対置させることや記号論を使って自分なりにダブリンを読み解き、観察し、体験したことに立脚していること :-）そしてそのことを忘れないために、私には自分で描いたいくつかの地図とフォトエッセイがあるのだから！

参考文献

Amin, A. & Thrift, N.（2002）. Cities: Reimagining the urban. Cambridge: Polity Press.

Baudelaire, C.（1965）. Art in Paris 1845-62: Salons and other exhibitions.

4　カルヴィーノ . 前掲書 .p.58

Hosei University Repository

London: Phandon Press.
Benjamin, W. (1973) . Charles Baudelaire: A lyric poet in the era of high capitalism. London: Verso.
Bridge, G., & Watson, S. (Eds.) . (2002) . The Blackwell city reader. Oxford: Blackwell.
Calvino, I. (1997) . Invisible cities. Weaver, W. (Trans.) London: Vintage, 1997.
Crang, M. (1998) . Cultural geography. London: Routledge.
Cresswell, T. (2004) . Place: A short introduction. Oxford: Blackwell.
de Certeau, M. (1988) . The practice of everyday life. S. Rendall (Trans.) . Berkeley University of California Press. (Original work published 1984.)
Evasns, J.,& Hall, S. (Eds.) . (1999) . Visual culture: The reader. London: Sage.
Frisby, D. (1981) . Sociological impressionism: A reassessment of Georg Simmel's social thoery. London: Heinemann.
Frisby, D. (1994) . The flaneur in social theory. In K. Tester (Ed.) , The Flaneur (pp.81-110) . London: Routledge.
Hall, E. (1966) . The hidden dimension. Garden City, NY: Doubleday.
Hall, T. (1998) . Urban geography. London: Routledge.
Hebdige, D. (1979) . Subculture. The meaning of style. London: Methuen.
Hertmans, S. (2001) . Intercities. London: Reaktion.
Highmore, B. (2005) . Cityscapes: Cultural readings in the material and symbolic city. New York: Palgrave Macmillan.
Jenks, C. (Ed.) . (1995) . Visual culture. London: Routledge.
Joyce, J. (1986) . Ulysses. New York: Vintage. (Original work published 1922)
Lefebvre, H. (2004) . Rhythmanalysis: Space, time and ewveryday life. S. Elden & M. Geralds (Trans.) . London: Continuum.
Lethman, J. (2003) . Fortress of solitude. New York: Doubleday.
Morrison, T. (1970) . The bluest eye. London: Vintage.
Pink, S. (2006) Doing visual ethnography. London: Sage.
Prosser, J. (Ed.) . (1998) . Image-based reesearch. London: Routledge Falmer.
Raban, J. (1974) . Soft city. Great Britain: Fontana/Collins.
Sennett, R. (1974) . The fall of public man. London: Penguin.
Sibley, D. (1995) . The metropolis and mental life. In K Wolfe (Trans.) , The sociology of Georg Simmel. New York: Free Press. (Original work published 1903)

Hosei University Repository

Smith, N. (1996) . The new urban frontier: Gentrification and the revanchist city.New York: Routledge.
Thornton, S., & Gelder, K. (1997) . The subcultures reader. London: Routledge.
Tuan, Yi-Fu. (1990) . Topophilia: A sudy of environmental perception, attitudes, and values. New York: Columbia University Press. (Original work published 1974)
Whelan, Y. (2003) . Reinventing modern Dublin: Streetscape, iconography and the politics of identity. Dublin: University College Dublin Press.
Woolf, V. (1925) . Mrs. Dalloway. SanDiego: Harcourt Brace Jovanovich.